

# 街場の就活論 vol.13

～新卒採用とキャリア教育に関するハナシ～

だん あそぶ  
団 遊

## 僕は、決めません！

「WILD CARD」というサービスが話題になっている。

簡単に言うと、他社の内定書（に準ずるもの）を見せればいきなり最終面接を受けられる、というサービスだ。たとえばA社から内々定をもらった学生がいたとする。その連絡はメールでくるのか、書面でくるのか状況によるだろうが、何らかの形で証明は可能だろう。その証明を持って、いきなりB社の最終面接を受けることができる、というサービスだ。

B社のメリットは、「A社の内定に足る人物である」という評価がすでにされていること。基礎学力の査定や、各種能力テストに時間とコストを費やす必要がない。そのため、A社が入社難関企業であるほど、評価は高くなるであろう。

サービス提供社のホームページから、コンセプトを引用してみる。

「もう、企業の選考でわずらわしい思いをすることはありません。転職活動中の方も、就活生も、内定（内々定）をGETしたら規定の内定証明をスマホで撮ってセキュアな環境にアップロード。審査

を通過すると、貴方に興味を持った他社から、秘密のスカウトが届きます。また、個人から企業に対して興味関心を示すことも可能になります」

\* \* \*

私が聞く限りでは、企業の人事担当者からは不評であるが、求職者からは「おもしろい」の声が上がっている。「いいね！」の数も多い。

不評の要因は「選考過程もタダとちゃうで！」ということだろう。基礎学力審査のために受験させているテストも、無料ではない。また、何よりも最終選考にステップアップさせる過程で、役職者も含めた多くのリクルーターが携わり、時間というコストを投資している。そのリターンを横取りされるようなものなので、怒るのも無理はない。

その意味では、利害関係者の調整を無視したサービスと言え、大きく展開していけるかどうかは疑問だと、個人的には思う。どれだけテクノロジーが進化しても、ビジネスサービス発展の鍵が利害調整にあるのは、ほぼ間違いのない事実だ。

一方、本稿で少し考えてみたいのは、このよう

なサービスが注目される背景についてだ。

\* \* \*

実は、「WILD CARD」も「転職」や「就職」に最近のトレンドをスパイスして誕生したサービスではないかと思っている。そのトレンドとは「決断を遅らせるサービスは受ける」というものだ。

「まだ決めなくていいよ」「もう少しゆっくりしたら」「何もそんなに急がなくても…。こういうメッセージを届けるサービスは、受け入れられやすい傾向にあると思う。

古くは、予備校もそのひとつではないだろうか。大学受験に落ちたのだから、「気持ち切り替えて次の道を探せ」と言っても間違いではない。ところが、「受験者がこれだけいると大変だよな。一回ダメだからと言ってあきらめるな！リベンジしようぜ！」と誘いかける。予備校という道が確保されているので、一年目は「挑戦の年」として身の丈を超えた学校を受験する人も現れる。結果的に、自らの高校三年時点での学力と折り合いをつける決断を、先延ばしにすることができる。

それでも以前は「大学受験に失敗して予備校に通う」というのは、学力的にも、金銭負担的にも、多少の恥ずかしさや気まずさが伴うものだった。しかし今では「予備校を経由してじっくり進路選択をすることに肯定的な世の中」になっている。予備校を大学院に変えても同じ。つまり、予備校のように、仕組みとしてはあったものも含めて、近年ますます、「決断を遅らせる」という決断を見る世の中の目が優しくなってきたと思う。

もうひとつ、結婚を例に考えてみたい。例えば、「友達が 24 歳で結婚した」と聞かされたとしよう。そのとき、人はどういう反応をするだろうか？ たぶん、多くの人が「こりゃまた早いなあ。子ども

でもできたんか？」と感じるのではないだろうか？ しかしこの反応自体は、普遍的なものではなく、晩婚化が進む最近の傾向だ。

もちろん、「高齢者出産を可能にする医療の進化」や「女性のキャリア意識を高める世論」というような社会背景もあり、言説が変わってきたのであるが、とにもかくにも「結婚する決断を遅くすることに肯定的かつ協力的な世の中」になっていることは間違いない。

\* \* \*

人は誰もが、与えられた社会環境の中で生きざるを得ない。結果的に、「決断を遅くすることに肯定的な世の中」で生活をし、誰もが何らかの文脈で「決断を遅らせる」ことに同意している。その結果、「決断を遅らせる」ことに寛容に育てられているのだろう。

世の中のビジネス書は「決断できること」を素晴らしいことだともてはやす傾向にあるが、「成功」は難しくても、「決断」は本来だれにでも簡単にできることである。それを「できない」「しない」「させない」ように環境的に追い込んでいくのが、社会成熟や進化のひとつの側面とも言えるのではないだろうか。そんな流れの中で生まれたのが、冒頭の「WILD CARD」だ、と私は思う。

文／だん・あそぶ

立命館アジア太平洋大学非常勤講師

「街場のキャリア論」と題して、インターンシップを軸（実習）にした授業を展開している。代表をつとめるアソブロック株式会社では、幼保の環境づくり支援事業を行っている。ほかに出版社、はちみつ屋、アパレルブランド、島興し、地域活性化など、多数のプロジェクトに取り組んでいる。